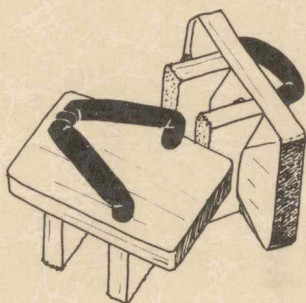


あゝ楼台の花に酔う

西山卯三



あしづの花に酔う

西山夕三



筑摩書房

あゝ楼台の花に酔う

一九八二年十月十日 初版第一刷発行

著者 西山卯三

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 東京二九一・七六五一（営業）

二九四・六七一一（編集）

郵便番号一〇一・九一

振替 東京六・四二二三

多田印刷・永興舎

© NISHIYAMA UZO 1982

0033-670574604

乱丁・落丁本の場合は御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担でお取替えいたします。

西山卯三（にしやま・うそ）

一九一一年 大阪に生まれる。

一九三三年 京都大学建築科卒業。

現在 京都大学名誉教授。

著書 『これからのすまい』（一九四七年）、

『住み方の記』（一九六六年）など。

『西山卯三著作集』（一九六七年、

全四巻）がある。

も
く
じ

三高自由寮	3
「運動」中学	12
志望学校	19
入学試験	26
体格検査	34
ドテカン	41
運動部	46
筋肉労働	56
赤と白	63
名物先生	69
寮歌	77
モグリ	85
レギュラー・コース	94
帰郷	101
一高戦	109
琵琶湖周航	116

紅葉の秋

126

艶福

134

羽衣松

141

水上部へ

149

対科レース

154

雪ふる頃

160

蒲団むし

166

ラグビー

171

室長懲罰

175

学年末

184

新学期

189

記念祭

195

対校合宿

202

双橋亭

211

全寮コンパ

221

推戴式

225

レース 231

月見草 238

御大典 244

軍事教練 252

不景氣 259

退寮 268

めぐりくる春 273

ニセ三高生 279

三高の自由 284

陸上勤務 292

犬の愚痴 297

紫の匂 304

さらば三高 313

結び 320

あとがき 321

あゝ楼台の花に酔う

カバーの装画・題字も著者による



三高自由寮

三高入学

春は花、秋は紅葉、山は比叡、水は鴨川。その鴨の流れの水もぬるみ、東山がかすむ春四月、仁和三平は意気揚々と花の都・京都にやって来た。大正天皇が年の暮れになくなった、その翌年のことである。紺の着物に小倉の袴、新しい帽子には白線が三本、桜花に三と入った記章、第三高等学校への入学が許可されたのである。

人生の新しい門出、三年間の高校生活が始まる。四人に一人のきびしい受験競争を乗りこえたよるこびと、初めて大阪の父母の家を離れて、何が待ちうけているのかわからない寮生活。希望と不安が心の中に渦まいていた。



入寮

悪い友達ができるかもしれないと、家の者は下宿をすすめたが、それに反対して、「ひとまず寄宿舎に入ってみる」ことになった。大阪高等学校の三年生になった兄の応援もあったから。とはいうものの、オンボロ寄宿舎でどんな生活が始まるのか、見当はつかない。

蒲団は鉄道手荷物にして先に送った。籐のバスケットを新しく買い、着替えやこまごました身の廻りのものをつめこんで、三平は入学式の当日、第三高等学校自由寮にたどりついた。

曰く何なに届、曰く何なに届、とやたらにいろいろな書類を書かされたあとで、

「君は中寮一番」といわれた。



中寮一番

うやうやしくその先生（実は後で寮監という事務屋さんとかかった）に頭をさげて事務室を出た。

アフリカの奥地でも探検するような気持で、渡り廊下から中寮の板張り廊下に入り、一番奥の方に“中一”の部屋をみつけた。

荷物は二階の寢室にといわれ、階段を昇った。“中一”の扉をがらりと開けると、これが三高生かと驚くような人相のわるい年輩の男が、ジロリと三平をにらんだ。それにくらべると紅顔の、赤い布印のついたシャツを着た三高生もいた。

蒲団が雑然とたたまれ、あたり一面に南京豆のカラや煙草の灰、新刊の円本などがちらばり、乾いた匂いが鼻をついた。



宣誓式

このおやじ先生が室長かもしれないと、頭をさげて挨拶した。しかしどこに寝場所をとるのか、こんなところでこのさき暮してゆけるのか、進んで寄宿舎を選んだのは失敗ではなかったか、と思う。

すぐ入学式があり、宣誓——いかめしい先生たちの前に一人ずつ呼び出されて署名をさせられた。何を宣誓するのかわからないまま、ぎこちなくへたな手で、前の者につづいて「仁和三平」と太い文字をかきこんだ。

理一甲三（理科一年英語の三の組）の教場に行ってみると、かねてから聞いていたように、黒板に○○君、××君と各運動部の呼び出しが書いてある。三平の名もあったが、見て見ぬふりして外に出た。



「散歩」

三高に入ったら、体をきたえるため何か運動をやりうと思っていたが、「部」の方の勧誘の熱心さが、かえって三平をしりごみさせたのである。

その日は物情騒然としていた。寮にかえり、他の新入生などとも顔をあわせ、寝室で蒲団袋をとぎ、畳の上にしく「万年床」を完成させる」と、外で晩飯をくった。室にかえってしばらく、皆がそろったところで、赤ら顔の大男が、これから散歩にしようと言言した。「散歩」とはブラブラ歩きか。何かおまけがついていて、それが「墮落」の一步になるのではないか。何が起こるか不安だったが、ここまでくれば成りゆきにまかせるとよりほかはない。

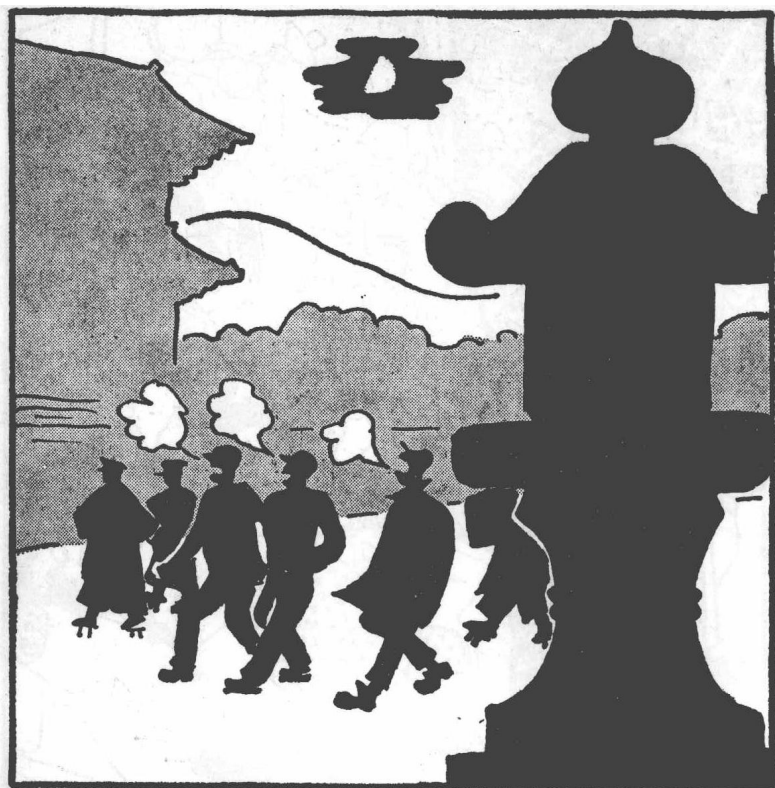


ちよつと二杯

学校の西門を出ると町の方へスタスタ。やはり散歩どころか「競歩」だった。

どこまでいっても踵をかえそうという気配はない。そのうちに明るい新京極に出て、そこから路次に入った飲み屋に案内された。赤印のシャツをきていた三木という男が、大はしゃぎで皆に銚子の酒をすすめた。赤ら顔の森という男が室長で、彼と三木とが二年生、ヒゲ面の男は「神陵六年」(三高在籍六年のこと、六年間で卒業しないと退学である)で、馬術の選手。ただしモグリで正式の室員ではない。あとは全部新入生である。

飲み屋も酒も初めての三平は、いよいよ変なことになったかと思う。



夜の東山

「さあ、金を出してくれ」
と、いまにいわれるかと思ってい
たが、そうではなかった。

別格の、神陵六年のヒゲ面氏が
ポケットから金を出して払いをす
ませた。

帰り道——だかどうだか三平に
はハッキリしなかったが、とにか
く道々、背の高い室長が得意にな
って放歌高吟。どうやら「紅^{くれない}萌
ゆる」の『逍遙の歌』らしい。

三高はまだか、まだかと、初め
ての「散歩」に、三平はすっかり
くたびれてしまった。

ようやく寮に帰りついて、「オ
ヤッ」と気がついたが、遅かった。
着ものの袖の中に入れていた十数
円入りの財布がなくなっていた。
酒代の比ではない。



ストーム

三平にとって最後に大失敗となったあわただしい一日もこれで終った。十五畳くらいの大きな寝室の両側に別れてとった寢床に、やれやれともぐりこむ。

疲れがでてうとうとしていると、突如、

「デカンショー」

の大歓声と床をふるわせる足音。

警鐘。バケツ、金盥^{かならい}、バット、箒^{ほうき}、

旗の大隊が押しよせてきた。

三木という二年生は、ガッパとおきて、ふりきんとどび出した。

何ごとが起こったか。寒さも寒し、ふるえているところへ一隊がなぐりこんできた。ふりきん先生も中にまじってデカンショを叫んでいる。入寮第一夜の恒例、新入生歓迎のストームだった。